別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　李 艶麗

本論文「清末写情小説における「女性」――近代初期文人の女性をめぐる肖像とその在り方」は、清代末期の上海で新聞・雑誌に多くの小説を発表するなどひろく表現活動をおこなった呉趼人（1866-1910）を中心に、それらの小説の中で女性像・男性像がいかに描写されているかを考察した研究である。清末に量産された小説は、一つの特色としてとくに感情表現により女性また男性を様々に描き出している。「写情小説」と称されたそのあり方・展開を本論文では追い求め、従来の政治的観点からは十分とらえられなかった実際の表現の形態を把握していく。

序論では、呉趼人の「写情小説」を、これまでの社会的政治的な批判として譴責を重視する視点からは、ただ古い伝統小説と見たり、その否定・変化によってこそ譴責小説があると見る傾向が強かったと指摘する。これに対して本論文は、多く描かれ読者が手にした写情小説こそが当時の文人の重要な時代精神だったのだと位置づける。また、その表現・創作には、科挙から外れた「男性文人」があり、彼等によって勇敢な女性（理想像）、貧弱な男性（自画像）などいくつかの類型が懐かれて活写されたのだとする。

序論でのいくつかの分類を背景に、第一部「写情小説の女性像と清末社会」では、その女性像が当時上海の清末社会で、読者に向けていかなるイメージを喚起し提示したかをとらえる。第一章「「徳の女」：異性文人の理想としての女性像」では、深い感情をもち勇敢ですぐれた徳を担った女性像が描かれており、これが文人による理想であったとする。また第二章「「社会」の中で鍛えた庶民女性」では、前近代の理想的美人像とは違って、家また夫を成り立たせる庶民的な女性が描かれており、これが文人により理想であったとする。第三章では、これらの女性像が、従来の「経典」的世界を乗り越え、新たな国家の再建に結び付くものだったことを、呉趼人以外の作家をも採り入れて描き出す。

第二部「写情小説の「女性」と文人たちの位置」では、かく表現する文人の社会的位置・心理などを位置づけ、そこから清末写情小説にあらわれる幾つかの女性像を論ずる。まず、第四章「写情小説と「女性」」では、多くの小説中に両性具有的あるいは母性的な傾向があり、その形態の提供があった、という。続く第五章「女性化された男性：男性文人が描く消極的な「男」」、第六章「文弱な男性像に見られる文人の投影」では、弱々しい文弱な男性像が、男性文人によって描かれている様を追い、それが当時の科挙制度を担わないいわば近代都市に向かう上海に生きた文人の投影であったことを指摘する。

第三部「「女性的なもの」と近代への働き」では、呉趼人以外の作家をも広く扱い、女性的なものが担われた時代的状況とそれが近代に変化してゆく過程をとらえる。第七章「「女性的なもの」を制作する社会気風」では、その女性性が社会的に一般的な風俗であったことをとらえる。

第八章「仕官の道から経済の道へ」では、通俗小説、探偵小説、科学小説、娯楽性・功利性を重視する小説などが、一種の「市場文学」になっていることを、具体的な事例を挙げつつ指摘する。第九章「消費される「伝統」と「近代」」では、林紓（1852－1924）を取り上げて、彼の翻訳活動が、救国を強調しつつも恋愛や趣味を基調とする小説だった、という。第十章「「女性的なもの」の延長と変化」では、辛亥革命や五四文化運動にふれ、それが清末写情小説の延長でありまたその近代的変化である、と論ずる。最後の補論「反写情の異色作家、冷血の作品を解読する試み」では、冷血＝陳景韓（1878-1965）が日本に留学していること、また写情小説に頻出する女性像・男性像とは違って、彼がときにそれと正反対の人生、精神を描き、さらに「虚無党」に関わっていたこと、を指摘する。最後に結論では、以上の論をまとめ、補足すべき点をとらえ、さらに今後は清末写情小説を国際的・世界史的な視野で検討する必要があることを述べる。

＊

以上のような本論文に対して、審査委員からは、大変な力作ではある。ただ、「写情小説」「女性」という枠組が先立っており、より具体的に資料にもとづいて論を立てることが望まれる。また対象とする時代としては、清末に絞って考察すべきであり、これを民国成立期以降や五四新文化運動にまで連関して論じるのは、やや飛躍がある。分析するための用語が、しばしば中国語から来ており、現代日本語としてはときに無理がある、といった指摘がなされた。

他方、把握されているのは主情主義であり、これは、近代化において、従来の秩序に懐疑がもたれ崩壊ないし変化するとき、しばしば発生する思想の運動である。そこに近代に向け、表立った政治とは違って底層において女性性が立ち上がって来ることは、日本史また世界史的にも指摘されている。その重要な一端を、清代末期の上海という時間と場所で押さえていることは重要である。今後の比較の方向を示す労作として期待が持てる、といった指摘もなされた。

いずれにせよ本論文は、写情・女性性という従来見過ごされる傾向があった重要なテーマについて清末の出版文化を踏み込んでとらえている。これは以後さらなる研究の課題を示す発見でもあり、本論文の学術的意義は大きい。本論文は、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると審査委員会の委員は一致して認定した。